せたかむい
古平町役場総務課
☎42-2181（代表）
平成19年9月1日

年表で読む古平の歴史

〔121〕

商工業 ⑦

各種工業の盛衰

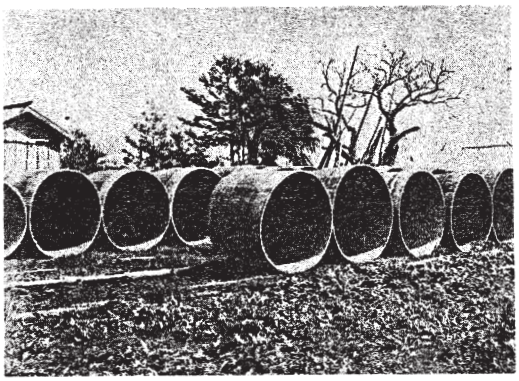
◆イリコ製造 ～続く

明治以前のナマコ漁を見ると、生食するということはほとんどなかったようで、元文四年（一七三九）幕府は松前藩に内命し、煎海鼠（イリコ）として長崎に移出させていた。その後、寛保元年（一七四一）から、松前藩は近江商人にイリコの買い付けや販売を任せるようになり、三年後の延享元年には四七、五〇〇斤（一斤＝〇・六キログラムとして二八・五トン）、翌年は少し減って三一、六〇〇斤（一八・九四トン）という記録がある。

古平場所の請負人であった、岡田家第五代弥三右衛門秀悦の分家に当たる岡田小八郎は、その頃松前居を構えていたが、長崎俵物（ながさきたわらもの）と言われるイリコをはじめ、干あわび、ふかひれなどを取り扱っていた。長崎俵物は当時の支那（現在の中国）への重要な輸出品であった。

イリコについては近江商人による取り扱い量を仲間内で定め、二一人で三九〇本（一本は一〇〇斤入れ）とした。これにより恵比須屋岡田家は四口であった。

漁具	乗組員	磯舟	漁期	採取高	海参製品
八尺	一人	一〇隻	六月初～八月末	四八〇〇貫	七二〇円
突き	一	四	六月～八月半	六四〇	九六



→本間酒造店の醸造用樽の乾燥風景（大正年代）記事は前号

◆肝油製造

古平でのタラ漁はいつ頃から行われたのかははっきりしていないが、安永九年（一七八〇）のフルビラ場所での産物の中に「タラ油」があり、その後二〇年ほど後に干タラが製造されていることが記録にある。この頃から漁獲が始まったと考えられるが、その漁法や産額などは全く伝えられていない。

天保九年（一八三九）当時、古平場所を請負っていた岡田家の記録の中に「鯡、串貝、鱈、カスベ、イリコ、秋味…」などとあり、ほかの文書にもタラの記録があることから、古平ではすでに重要な産物であったと思われる。

明治になり、越後地方でタラ漁の経験のある漁夫が漁の時期に来て漁獲し、地元の漁師にもその漁法を伝えたことからタラ釣り漁業が盛んになり、棒鱈や開鱈を製造していたが肝臓は捨てていた。

タラ肝油の製造は明治五年、函館の五藤精軒が茅部郡で初めて製造をした。明治一〇年、開拓使は茅部郡臼尻村で肝油を試験的に製造させ、同一三年、官費で工場を三か所

設置し、同一五年にこれを民間に払い下げた。

後志管内では明治一一年、高島郡祝津村白鳥喜四郎が初めて製造し、その後、鈴木新兵衛が開拓使の補助を受けて製造に当たった。

古平郡では明治一六年、港町戸沢惟充が肝油製造に初めて着手した。同年に肝油一五石、翌一七年には五六石を製造していて、同一八年、小樽市量徳学校で開催された札幌県主催の水産品評会に、戸沢惟充出品の鱈肝油は三等賞に入賞し、賞状と三等賞旗が授与された。

鱈肝油　三等賞　戸沢惟充

水産品評会出品優等に付於小樽之を授与す

明治十八年八月二十四日

札幌県印

また、同年一一月、根室県で開催された北海道物産共進会にも出品し二等賞に入賞、賞詞が与えられた。

産額（ポンド）　価格（円）

八，五〇〇　六六三

一一，〇〇〇　七七〇

日本薬局方による査定

産地	色	臭味	酸性度	
古平	清澄	臭、味普通	やや強い	全く清澄
岩内	淡黄	清澄	臭、味普通	やや弱い	やや混濁の痕跡
高島	淡黄	清澄	臭、味普通	やや弱い	全く清澄

鱈肝油

品位優良にして最も薬用に適し産額殊に多し其の労洵に嘉賞すべし

札幌県後志国古平郡濱町　戸沢惟充

※明治一五年二月の開拓使の廃止から、同一九年一月に北海道庁が置かれるまでの期間、北海道は札幌県・函館県・根室県の三県に分割されていて、札幌にはこれらを統括する局が置かれていたので、この時代を三県一局時代という。これは北海道に他府県と同じような行政を行おうということであったが、この三県の分け方には無理があり、四年後には北海道庁と改められた。現在のように支庁が置かれたのは明治三〇年からで、当初は一九支庁があった。

明治一九年、石川県川北郡七ケ森から移住して来た寿原要太郎は、翌二〇年から鱈肝油の製造を始め事業は順調であったが、同二八年一月、ランプの火が元で工場を焼失した。直ちに復興し、その翌二九年に積丹郡日司村に工場を設置し、更に同年七月には増毛郡別狩村にも工場を設置した。

この間、しょうゆ醸造業にも進出し、年間一六一三五〇リットルを生産、一〇印醤油として北後志一円に販路を拡げていた。

寿原要太郎の肝油製造に続き明治三〇年、港町に中村栄太郎が肝油工場を設置した。

これらの肝油製造は順調に推移し、明治三三年には次のような生産高であった。

明治三四年、北海道産の精製鱈肝油を日本薬局方の規定によりその品質を査定されたが、成績は右のような上位の成績であった。

製造した肝油はすべて東京へ送られていた。明治三六年、第五回内国勧業博覧会が開かれ、それに出品した寿原要太郎の鱈肝油は三等賞に入賞し、同三九年の全道共進会では一等賞が授与された。

住所	氏名			
港町	中村栄太郎	硝酸で処理	全く清澄	零度での清濁
浜町	寿原要太郎	硫化水素で処理	少しも変化無し	全く清澄
		少しも変化無し	少しも変化無し	微小に混濁
		少しも変化無し	全く清澄	

◆ 水車で精米業

鯡漁場では多人数の食事を賄うことから、船で直接秋田や越後方面から精米を買い付けることが多かったが、一般の商店では小樽などから玄米で仕入れ町内で精米にしていた。精米には足踏み式の「ぱったり」といわれる臼でついて精米していた。

時期は不明だが新地町の上の方に小さなダムを造り、そこからの水流を利用して水車を回し、それを動力にして精米をしていたという。そのダムのあった辺りを水車の沢と呼んでいた。

明治二六年、新地町で海産・米穀商をしていた正藤沢勇蔵が、本陣の沢でチョペタン川の水力を利用して、水車による精米業を本格的に始めた。

— 続く —

高野名幸作さんの日記から
当時の世相を見る〈128〉

大正十五年　～続く

▼一一月二七日

昨日来の雨、今日も降り続いている。前は毎日の雪で根雪かと思っていたが、この雨で雪もほとんど解け、馬そりは馬車になった。九時から役場で、営業取得税の改正になった点について講演あるからとの通知で行く。商人連四、五〇人が集まり、改正税法につきいろいろ聞く。正午頃帰る。雨は一日中休みなく降る。今村からハタハタを頂き、夜焼いて食べたが今年の初物だ。

▼一一月二八日

今日も朝から暴風雨、海は大時化だ。町の雪もこの雨で九分どおり消えてしまった。熊さんは暴風雨のなか月末の集金に出かけた。亡母の命日で僧侶が下がり妻は支度に忙しい。熊さん集金より帰っての話しではどこも不景気の話、従って集金も思わしくなく一〇円余りだった。積丹半島鉄道問題もようやく中央に認められたので、この機を逸することなく猛運動すべし。二五日に余市、古平、美国町長始め有志一〇余名札幌へ出張、それぞれの関係方面へ陳情運動している。

㊥主人、㋑主人らも行かれた。

▼一一月二九日

今日も朝から雨降り、海は時化で余市行きも止まる。熊さん新地方面へ集金に出かけたが不況のためさらに入金は無い。本年はイワシ、イカ、大謀不漁、出稼ぎしたイカつけも函館、南部共に不漁、陸は冷気のため稲、畑作大不作、商人は数の子、〆粕大暴落、殊に数の子は一本七〇余円で買ったものが四〇円ぐらいに大暴落し大打撃、何れを見ても悪材料ばかりだ。呉服屋連は綿糸の暴落で仕入れの品を値下げ、これまた損害だ。こんな年は早々にいき、景気の良い年が早く来ればよい。

▼一一月三〇日

いよいよ一一月も終りとなった。今日もまた朝から雨降る、よく降ることだ。町は道路が悪い。熊さん集金に行くがハカバカしくない。正治をだっこして浜へ出て見る。海はだんだんないできた。余市通いは三日も休んだが今日はようやく通う。夜、支店の湯に入りに行く。星は満天に輝く良夜だ。天皇陛下の御容態よろしからず、各地で快癒祈祷などがある。

▼一二月一日

起床五時一五分、祝聖会例会日、町はまだ真っ暗、洗面後五時半に出かける。星が輝いている。先月一五日の例会は大雪で長靴も埋まるほどであたが、今日は雪は全く無く、下駄がけで首巻きだけで行く。台所で焚き火にあたりのち読経、和尚の部屋で時事を談じ八時帰る。珍しい好天気だ。妻はこの天気に洗濯物、張り物をするとて裏で一生懸命だ。小樽通いの共栄丸も来た。

▼一二月二日

起床六時、子供らも早く起きて来て家はなかなか賑やかだ。子供らは無邪気で可愛いものだ。正治は海が好きで、一、二回浜へだっこして行く。四郎と悦三はパッチ、リンゴが大好きだ。九時頃から暴風雨になる。その後雪がチラチラしてきて、夜になり吹雪きに変わった。いよいよ冬らしくなった。

▼一二月三日

起床六時半、昨夜来の大吹雪、今朝起きて見ればずいぶん積もっている。寒いので何も出来ない、コタツにあたっている。㊥から五日より七日まで売り出しなので、ビラ書きを頼まれ書く。のち入営兵を送る旗二枚書く。幸治から手紙が来る、一三日から一八日まで試験、一九日から休みになるとのこと、悦三、四郎らは帰るのを楽しんで待っている。

▼一二月四日

昨日来の吹雪、今日も一日中吹く。寒さのきびしいこと寒中の如く、雑巾も手拭いもカンカンに凍る。それでも子供らは元気よく雪

ダルマをこしらえている。

▼一二月五日

今日は珍しくも天気快晴になった、寒さも昨日よりいくらかゆるんだ、海はまだ時化ている。裏の漬物樽を熊さんと倉に入れる。本と支店から依頼された入営兵を送る旗四枚書く。新聞によれば二日夜、釧路で大火あり二百余戸焼失、罹災民はこの寒空に困窮しているとのこと、気の毒なことだ。古平有志として古平町民大会を七日、古盛座で開くとビラが出ている。漁港、鉄道問題、役場新築問題、其の他のこと。夜、大鶴間へ遊びに行く、時事を談じ一一時帰る。

▼一二月六日

今日は天気快晴、ポカポカ暖かく小春日和だ。海も上ナギ、磯まわりも大謀も出ている。降った雪もこの天気で消える。今日も入営軍人へ贈る旗を二枚書く。去年の今頃は綿糸二七〇～八〇円で一〇円五〇銭で売っていたが、本年は一七五円ぐらいになり、去年の残りを持っている人は大変だ。

▼一二月七日

起床七時、まだ電灯がついている。海は上ナギ、小樽から勇丸も来た。店の刺網ポツポツ売れ行く。目下原糸一七二円が相場だから綿網類も安く売っている。呉服屋では福引き売り出しをやっているが、平常と変わりなくさびしい。いよいよもって不景気なのだろう。旭川絲屋銀行も殖産銀行の尽力でようやく光明を見ることができたようだ。

▼一二月八日

起床七時、この頃は大抵電気がついている中に起きる。子供らも皆壮健で、機嫌よく成育していることは何よりも幸福である。今日入営兵出発なので、七時頃から町中は見送り人で賑やかだ。悦三、四郎、正治も旗を見て喜んでいる。雨風の大時化になり船で行かれぬので、予定を変更して陸行することになった。私らは歌棄まで見送る。道路は雪が融けザブザブだ。明日は古平町会議員二名（小野、仲谷辞任）の補欠選挙日だ。立候補しているのは小町勝治、八反田長太郎の二名だ。

▼一二月九日

昨日来の雨風が今暁より大吹雪に変じた。店は板戸を二枚だけ開けている。小学生らも皆父兄がついて行く。寒さもきびしい、硯の水も凍り足も顔も出ているところはみんな冷たい。文治のところから手紙が来る。一八日に試験が終り一九日に帰るから、悦三、四郎らに何をみやげに買って帰るかとある。久し振りで帰るのも楽しみなのだ。早速、悦三らの注文でアメ玉、アンパン、パッチなどと知らせてやった。今日は町議選だがこの吹雪で父も行かなんだ。五時頃に店を閉めた。戸外は大吹雪の風の音、ものスゴイほどだ。

▼一二月一〇日

昨日来の大吹雪も今日は少し静かになった。昨日は二十八度(F)まで下がり、顔も手もピリピリするほどであったが、今日は三十二度(〇．六度C)でよほどよい。海はまだ時化ているのか三千トンほどもある汽船が前浜に避難している。午後二時頃、久し振りで新地方面へ行く。由で話した後三へ寄る。ストーブにあたりいろいろ話し四時帰る。聖上の御容態よろしからざる旨、新聞に見ゆ。

▼一二月一一日

今日はまた寒さきびしく、朝の寒暖計で三〇度F。停泊中の汽船も沖は時化てるとみえてまだ出港せぬ。命日だがお寺が忙しいので下がらぬ。私が読経した。戸外はまだ吹雪、寒さは寒中の如し。

▼一二月一二日

起床七時、一年中で一番日の短いときだ。今日もまた寒さがきびしい。奥のコタツだけでは子供らが入りきれぬので、店にもコタツをかけたが子供らは大喜び。吹雪と寒さがきびしく汽船はまだ停泊したままだ。聖上の御容態よろしからず、かねて英国へ御留学中の秩父宮殿下には、お見舞いのためにわかに御帰国なされた由。一一日午前零時、沼津市で大火あり二千百余戸が焼失せりとのこと。夜、本へ遊びに行きいろいろ時事について話し、一〇時帰る。

▼一二月一三日

起床七時、今日は昨日よりも少し寒さもゆるみしのぎよい。四〇度(F)くらいなら寒さも楽なものだ。本では亡き主人の命日で父はお参りに行く。正午頃、小樽田の店員が来て茶の間でいろいろ話し昼食を出す。雪がチラチラ降り出している。

▼一二月十四日

起床七時、今日は割合雪も降らず寒さもゆるんだ。海もナギて久し振りにカレ網船も出た。菊地さんが遊びに来て、タラ釣り漁も終りこれからカレ網漁にかかるとのこと。一般に不況のため生魚も非常に安いとのこと。幸治と文治らは昨一三日から二学期試験が始まり、今頃は一生懸命やっていることだろう。夜、太〇鶴間に遊びに行き、時事を談じ一〇時帰る。

▼一二月一五日

祝聖会例会日、五時四〇分に目が覚めた。洗面早々六時に出かける。静かな空、早いところでは雪かきをやっている。吉井さんの角まで行ったら読経の声が聞こえた。第四番目であった。例のとおり和尚の部屋で時事を談じ八時帰る。熊さんは板倉からアバ縄類をソリで運搬する。十かあさん、足を腫らして今日小樽病院へ行く。年末に際し困ったことだ。

▼一二月十六日

起床七時、いつもより薄暗いようだ。この頃は刺網がポツポツ出る。[ヨ]主人と[用]主人、かねて東京へ委託していた製品が意外と安値の電信が来たので、東京へ行くことになった。私は[本]主人と港町まで行く。昼食を馳走された後波止場まで行き見送りをする。実際に意外の安値をつけられ、これでは損の上にまた損とのこと。某のためにとんだ災難を受けたようだ。税務署員が来て取得税の調べをする。売り上げを合計して届けることにした。坂下忠義が入営することになり、[本]から贈る旗を頼まれ書く。聖上の御容態、十六日の午後一時頃急変あらせられた旨、号外が貼り出される。

▼一二月一七日

起床七時半、今日は海も静かで天気もよい。小樽通いの勇丸が久しぶりで来た。正月用のミカンなどたくさん来て歳末景気になる。坂下さん、函館要塞へ召集され、明日出発するので、私はお祝いの挨拶に行く。帰って昨日に引き続いて日々帖と現金帖の合計をやる。夜、父は坂下さんの送別会によばれて行く。

▼一二月一八日

起床七時、新聞を見れば聖上御容態はますます重く、各大臣の見舞いや協議やらで葉山は大混雑とのこと。坂下さん入営につき浜まで見送りする。幸治らは今日で試験が終り、今夜はいろいろみやげものなど買って、明日の帰省を楽しんでいることだろう。夜八時頃より急に大吹雪になり、電灯も消える。営業税、所得税の届書を出した。収益金千五百円、売上げ一万八千円

▼一二月一九日

昨夜来の暴風、今日は一日中吹く。海は稀なほどの大時化だ。幸治ら、今日小樽から帰省するところこの大時化では帰られぬ。明日は陸行して帰るかもしれぬ。大吹雪なので板戸を閉めている。聖上の御容態はますます重く御危篤の報、新聞に見ゆ。夜、太〇に行き電灯料値下げ問題、その他について話しする。

▼一二月二〇日

起床七時、一昨日に引き続き今日も海は大時化、風は吹くが雪は降らぬ、正午頃から風もだんだん静かになり、陽もさして天気模様になった。幸治ら、船は止まっているが陸行なら来るによいか。昼頃までは何の便りもない。しかし、たくさん連れがあれば陸行して来るかもしれない。夕方、中村床屋で散髪する。歳末になったが本年は何業もよろしからず。大不況に加え警察署の普請には請負師が不払いのため、人夫、建具、屋根屋などが大迷惑とのこと。

▼一二月二一日

起床七時、旭日がキラキラと障子に映り珍しい好天気だ。正治をだっこして浜へ出て見る。時化も次第にないできた。正午頃古英丸、外浜丸が来たので、熊さん、悦三、四郎らが浜まで幸治らを迎えに行く。古英丸で文治だけが来た、幸治は午後の船で来るとのこと。午後三時の富丸で幸治が来た。子供らはみやげの本、アメ玉、パンなどいろいろで大喜びだ。二人共入学以来一日も休まず壮健で、こうして帰省するのは本人らも楽しみだろう。カレ網も皆出たが相当に漁があったとのこと。

▼一二月二二日

起床七時、天気快晴、割合暖気で雪も降らない。新聞によれば、聖上陛下、御容態少しく良好に向かわれたとのこと。学校では今日郷社へ全快祈願で参拝したとのこと。幸治らが帰省しているので

家では大賑やか。二階でだい鍋をやるとて大騒ぎしている。午後からヤマセで、また海は大時化になった。幸治ら昨日帰って来てよかった。今日は亡き〒父上の七回忌命日に当るので、午後から妻やソイさん、本おっかさん、支店のねえさんらが、禅源寺へお参りする。私は夜、仏前で読経した。亡き父上はなかなか世話好きで楽天的な性格の方であったが、早逝きて七年になる、早いものだ。

▼一二月二三日

昨日来の暴風、今日はいっそう甚だしく大荒れ、海は大時化になった。年内に鮮魚でもたくさん揚がれば漁師も商人もよいのだが、この時化では困る。新潟からモチ米を積んだ汽船が昨日入港したが、時化で今日もまだ荷揚げ出来ぬ。二五日に本の分とモチ搗きの予定が、カからモチ米を買うことにしていたが、カのモチ米が荷揚げできず、これでは二五日に間に合わぬので二七日に搗くことにした。幸治や文治も久しぶりに弟や妹たちと遊んで大騒ぎだ。

▼一二月二四日

起床七時、引き続き今日も暴風で時化、モチ米積みの汽船が入港しているが今日も荷揚げできぬ。漁師も年末なのに時化のため出漁できず困っている。町中ではマユ玉の木を売り歩く人、モチ米を運搬する人などで歳末気分になった。梅村さん、正月飾りの裁ち物いろいろ売り歩く。二〇銭ほど買ったがなかなか上手なものだ。大荒れも夕方からだんだん静かになり、入港中の汽船もようやく荷揚げが始まったようだ。余市通いの古英丸が荒波を無理して来た。明日はよいだろう。夜は年末帳簿、目録書きなどをやる。八時頃から大雪になり、四、五寸も積もった。

▼一二月二五日

昨夜は雪がずいぶん降った。六時起床、真っ暗だが外に出て見ると雪が五寸ほども積もっている。六時半頃、ようやく東の空が明ける。向かいの電気会社の前にタイムスの特電の張り紙が出ている。「テンノウヘイカ一ジ二十五フンホウギョセラル」間もなくか本主人も出られて、昨晩から今暁までラジオで次々に放送されていたとのこと。葉山ではいかばかり混雑していることやら。八時頃から町では弔旗を立てて弔意をあらわす。夜は仏前に灯明を上げ、聖上陛下崩御につき観音経を上げてご供養の微意をいたした。間もなく電気会社の前にタイムス特電が張り出される。

「廿五日午前七時発、摂政宮殿下葉山御用邸に於て践祚式を挙げさせられる。年号を昭和と改元

廿五日午前八時」

▼一二月二六日

起床七時半、静かな空だが寒さがきびしい。洗面早々に浜へ出て見る。珍しい上ナギ。磯まわりも出ている。小樽通い勇丸、共栄丸も久しぶりに本陣の浜に入港している。町は売り出し中の旗アチコチに立っているが、何商売も本年は大打撃を受けているので売れ行き不振とのこと。昨日は未明にモチ搗きをやるので支度している。本の日高へ行ってた姉さん、小樽まで来ていたので、今日のナギに古英丸で来られた。妻は浜まで出迎えに行った。熊さんは年末目録配りに沢江、浜中方面をまわる。どこで聞いても不況不況ばかりだ。聖上陛下の崩御により、三〇日まで歌舞音曲は停止となる。

▼一二月二七日

今日はモチ搗き、〒さん昨夜一〇時頃来て店のコタツで休んでいる。熊さん、〒さんらは二時頃から起きて火を焚き支度にかかる。三時頃から早ペッタンペッタンモチ搗きにかかる。キネの音は景気よいものだ。モチ搗きの一行は才太郎さん、菊地さん、天野さん、若松さん、〒さん、栄七さん、熊さん、ほかにも女の人が田サヨさん、〒おばさんらだ。子供らも五時頃には起きてモチ搗きを見て喜んでいる。私も四、五臼搗いたがなかなかこわい。一一時頃に全く終り、昼食をして手伝いの人たちは帰った。私は日主人が東京から帰られたので二時頃新地方面へ出かけ、帰途用さん宅へ寄り、三時頃日へ寄る。東京にいた時はちょうど年末と陛下のご不例があり、数の子の人気も一番安いところで処分したとのこと。何事も災難だ。東京の話しをいろいろ聞き、夜食をよばれ七時帰る。帰って帳簿調べをし、今夜は亡き母七年忌の命日なので読経する。亡き母のご恩を思い出す。

▼一二月二八日

起床七時半、昨日のモチ搗きの疲れで朝寝した。今日も静かでナギ、カレ網や磯まわりも皆出ている。漁は相当にあるが一般に不況のため、鮮魚の値段も安いとのこと。熊さんは集金に出かける。何れを聞いても不況の話ばかり、店も今年はイワシの不漁で二千円余りの未収がある。商品が一般に売れ行き不振でよくないが、別に借金取りに責められるようなこともなく、一〇余人の家族が壮健で暮らせることは感謝せねばならぬ。今日は亡き母の七回命日だ。想起すれば七年前の本月本日母は逝かれたのだ。和尚さんが来て読経する。夜は台所でモチ切りをやる。

▼一二月二九日

起床七時、まだ電気がついている。洗面後店の始末をし、浜へ出て見る。静かで上ナギ、漁船は皆出ている。熊さんは今日も午後から集金に出かけたが一向に集まらぬ。歳暮品貰ったところへお返しのリンゴを配達する。エビス佐藤物産から船便あるから縄積むかと電信が来た、二円一〇銭とのこと、諸物価安いのにアバ縄だけ高いので見合わせの電信を打った。今日は暖かく実にしのぎやすい日だ。雪も例年より不足だ。これくらいなら冬でも上等の方だ。父は新地町の安藤豆腐屋の老人死亡につき通夜に行く。ついでに「ヨ」「用」に寄るとて三時頃出かけた。この頃は気分が良いとて元気だ。夜、文治、四郎、トミらと支店の風呂によばれて行く。夜食後、妻、コノさん、ミサ子さん、熊さんらで、カレカマボコ、キンピラ、ナマスこしらえなど、一〇時頃まで賑やかにやっている。

▼一二月三〇日

七時起床、父は昨晩通夜に行きそのまま泊まって、今日の葬式送りをして正午頃帰られた。勝手の方は正月支度でいろいろと忙しい。熊さんと私はモチ切りをやる。熊さん午後から集金に出かけたが不況のせいで相変わらずだ。天気は珍しく快晴、暖気で雨だれが落ちている。ちょうど三月頃の陽場が近づいたようだ。今頃こんな上天気は珍しい。昨年の今日は大吹雪と寒さで二十八度(F)だった。正月が近づいたといっても大喪中のため、松飾り、〆縄、マユ玉などもつけるところもなく、いたってさびしい正月だ。私の家でも子供らがマユ玉がほしいと言うが、今年だけは特別なので遠慮した。

▼一二月三一日

起床七時、静かなそして暖かい天気、寒暖計を見れば四〇度(F)にもなっている。例年より一〇度も高い。日中は太陽が輝き、雪が消えて道路はザブザブしている。向かいのやぶ長や電気会社の前は土が出ている。こんな暖かいよい天気は何一〇年ぶりの珍しいことだ。いよいよ本年も終りになった。何業も不振不況に終ったが、借金も無く、家族も別段大した病気もなく、この年を過ごせることは実に精神的に幸福といわねばならぬ。熊さんは集金、私は帳簿整理や勝手の方の手伝いをやる。四時頃、文治、四郎と三人、支店の風呂によばれる。帰って五時から子供らが楽しみに待っている歳取りのご馳走を茶の間に出す。みんな並んでお膳につき、子供らは大喜びだ。正治も明年はお膳に坐るだろう。こうして大勢が喜びつつある様は得難い楽しみである。六時頃終り、子供らはカルタ取りなどやって遊ぶ。私はゆっくり頂く。夜に入っても雨だれがダラダラたれ、星が満天に輝き、静かなよい夜だ。この分なら明日も快晴ならん。

※ 大正一五年一二月二五日改元昭和元年となる。

大正天皇が崩御されて間もない午前四時、崩御と新帝の即位を知らせる号外が出たが、東京日日新聞は「元号は『光文』であろう」と報じ、朝刊で「元号は『光文』に決定」といち早く報道した。

しかしこれは誤報で間もなく正式に元号は『昭和』と発表され、これは誤報事件として大きな問題になった。実際はいくつかの元号が候補に挙げられ「光文」と「昭和」が最終的に残ったが、東日新聞のスクープか早とちりによって、急遽『昭和』に決定したともいわれているが真相は不明とされている。

元号の「昭和」というのは、中国の古典『書経』にある「百姓昭明、万邦協和」からとったものである。

〈続く〉

（昭和二年分は欠、次回は昭和三年から掲載します）

～町内の学校探訪～

古平小学校

◇浜中学校竣工　～続く

ようやく開拓が始まった北海道ではまだ本州のような整った町村の行政組織がなく、戸長役場といわれる役所が置かれたが、仕事の内容や報酬、誰をどのように選ぶかという選任の方法も一定しておらず、自宅が事務所を兼ねるという状態であったので、学校を町村で建設するということは容易なことではなかった。

当時の町村というのは現在のような自治体としての町村ではなく、古平で言えば古平郡にふくまれる現在の大字名が町村であった。そして明治一三年までは戸長役場が三か所、同一四年から二か所となったが、学校建築の費用はすべて町村が負担しなければならなかったのである。

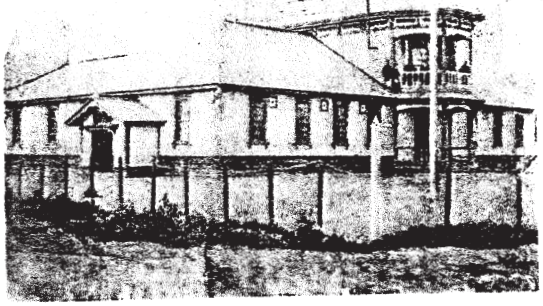
だが幸いなことに当時、日本海沿岸は鰊の好漁に恵まれたことから、郡内の中心地にまず学校が建設された。古平郡内でもまず浜中に小学校が建設されたが、好景気による漁場や、手広く営業している商店などからの寄付によることが大きかった。

◇学齢児童の入校願い

満六歳から満一四歳までの八年間が学齢で八年間学校に通わせるのではなく、この期間中に就学させる)、保護者には児童を入学させる義務(就学強制)があり、町村には学校を設置する(強制負担)することを義務づけた。

義務教育であっても小学校の入学には入校願を提出し、明治三二年までは授業料も払っていた。

教育に関しての大きな特徴は、戦前までは教育の法規は法律によらないで勅令(議会にはからないで天皇から直接発せられる命令)によってなされていたことである。国の議会制度があっても、こと教育に関しては大して機能していなかったことになる。



→竣工した浜中学校
中央部が二階建て、壁は白ペンキ塗りという、当時の小学校としてはなかなかモダンな建築様式であった

入校願

古平郡新地町四十二番地
墓目八三　三女
墓目　谷
当十年

（朱書）
願之趣聞届候事
右入学御許可相成度尤も御規則の儀は堅く為相守可申候也
明治十五年一月七日
証人　墓目八三

濱中学校御中

学力試験合格者は次の進級証書により進級した。

第四号
小学六級後期生
川島久二郎
十年十ケ月
小学五級前期へ相進メ候事
明治十四年十二月　四日
開拓使後志国古平郡
濱中学校

入学した者はまず八級前期生となり、年二回行われる学区学力試験により合格者は進級した。

明治一二年に学校制度を改正したが、北海道は未だ植民地のような現状だとして、開拓使はそれに合わせて小学校の規則を新たに定めたが、函館・小樽・札幌などの一部の学校では国の定めた小学校則によって教育が行われていた。小樽区の小樽量徳小学校が先進校としての指導的な役割を担っていて、この伝統は戦前まで続いたと言われている。

道内ではほとんどの小学校は変則小学校則による教育が行われ、進級を認定する学力試験は小樽量徳小学校訓導などにより行われた。

→学校建設資金を寄付し、開拓使から褒状を受ける

◇学事会の発足

学校制度は出来たものの、肝心の教員の養成はなかなか進まなかった。明治九年、函館に北海道で初めての教員養成機関として小学教科伝習所が設置され、続いて札幌の小学校と先の小樽量徳小学校に教員速成科が設置された。同一三年には函館の伝習所が師範学校となったが、教員の養成は時間を要する問題であった。

地域の学校教育体制を整え、どのように児童に教育するかという問題を解決するために、同一二年、教育関係者が集まって「小樽外六郡学事会」が発足した。小樽外六郡の小樽・高島、忍路・余市・古平・美国・積丹の教員が小樽量徳学校に集まり、教科書を含めて、学習指導上の問題を研究討議した。この会は毎年一回開かれることになった。

明治一三年、浜中学校を建築中に、沖小学校が創立された。（沖小学校については二一〇～二一一号参照）

◇札幌県で学事規則

北海道は三県時代（札幌県・函館県・根室県）であり、教育についてもそれぞれの県で、限られた範囲で規則を定めることができた。

明治一六年、札幌県では今までの小学校則を廃止し、県内を九七学区に分け、新たに学事規則を定めて実施した。

北後志の学校（明治一六年現在）

学校名	所在地	創立年	在籍児童（男・女＝計）
澤町学校	余市郡浜中村	明治七年	一四二・五一＝一九三
黒川学校	余市郡黒川村	同一六年	一〇・一六＝二六
湯内学校	余市郡沖村	同一四年	一八・一＝一九
浜中学校	古平郡浜中村	同六年	一三一・二六＝一五七
沖学校	古平郡沖村	同一三年	二五・一三＝三八
小泊学校	美国郡小泊村	同八年	七六・八＝八四
日司学校	積丹郡日司村	同一四年	三六・五＝四一
来岸学校	積丹郡来岸村	同九年	四四・四＝四八

小学校を初等科・中等科・高等科の三科とした。

初等科＝修身、読書、習字、算術の初歩、唱歌、体操

中等科＝初等科の科目の外地理、歴史、図画、博物、物理、農業、工業、商業の初歩、女子には裁縫を加える。

高等科＝中等科に引き続いて化学、生理、幾何、経済の初歩を加える。

修業年限を初等科・中等科は各三か年、高等科を二か年とし、通して八か年とした。これは先に国が定めた小学校則によるものである。

――続く――

岡田家の繁栄と北前船～古平

一膳箸（いちぜんばし）の船印

岡田家が急速に大商人としての地位を確立できたのは、場所請負による莫大な利益を上げたことがその要因になっている。

一族が残した文書の中にも、「私商内（あきない）第一の場所フルヒラ」、「海陸とも我家の開拓」また「ヲタルナイ（現在の小樽市街の東側）より一層早きよう」とあり、古平場所の請負の時期が早かったことがうかがわれる。

古平場所を請負った時期についてははっきりしないが、古くから交易の権利を得た場所であり、交易によって産物を主に越前、加賀、越中、越後、出羽、敦賀などに回漕して売り捌いていた。

恵比須屋（恵美須屋とも書くことがある）岡田家が慶応二年、古平場所を種田徳之烝ほか二名に譲渡するまでの請負場所を一覧にすると別表のようである。

蝦夷地の金山を開発するため、江戸金座（徳川幕府直轄の金貨の鋳造などを行っていたところ）の役人であった板倉源次郎が、元文二～三年（一七三七～一七三八）に各地を踏査したが、当時の松前の風俗や習慣、産物、アイヌの人たちの生活を書いた『北海随筆』という本があるが、この中に場所請負いのことがおおよそ次のように書かれている。

「松前の周囲はおよそ八百里と言われていて、船の通わない土地を奥蝦夷地と言っている。（松前城下から西の方ソウヤまでは海路三百里ばかり、東方キリタップまでも大体同じ。この東西の両地までは商船が往来して交易をすることがある。これより奥は船便がないが地続きでアイヌの居住する村々があり、そこからソウヤ、キリタップに出て交易している。北の外れをウラヤシベツと言う）船の通う土地に住むアイヌは皆松前の百姓である。その内百里以内の土地は領主の土地で、その外は残らず家中の者の知行として貸し与えていて、余っている土地は全く無い。蝦夷地には一村ごとにアイヌの頭がいて、これを乙名（おとな）と言っている。松前の命令を受けて漁猟をすることを業としている。商人は近くの蝦夷の村々を請負って松前へ運上金を納め、その請負場所に本家を造りこれを運上家と言う。蝦夷人を支配して漁業をさせ、その得物を納めさせて他国にこれを

場所名	請負の開始	請負の終わり
古平	享保年間	慶応二年
小樽内	延享年間	慶応元年
岩内・古宇	寛延三年	明和年間
利尻・礼文・宗谷	明和二年	文政年間
石狩	明和五年	安永六年
尾札部領恵山	明和六年	安永四年
磯谷	安永八年	寛政一二年
寿都	天明元年	寛政四年頃
浦河	寛政三年	寛政一二年
石狩（カバト）	同	同
苫前・留萌	享和二年	文化年間
石狩（ユウバリ）	文化元年	不明
美国	文化二年	不明
室蘭・幌別	嘉永二年	慶応三年

請負の開始	請負の終わり
一七一六～	一八六六
一七四四～	一八六五
一七五〇	一八六四～
一七六五	一八一八～
一七六八	一七七七
一七六九	一七七五
一七七九	一八〇〇
一七八一	一七九二～
一七九一	一八〇〇
一七九一	一八〇〇
一八〇二	一八〇四～
一八〇四	
一八〇五	
一八四九	一八六七

※これは近江中央新聞（昭和四一年）によったものですが、市町村史とは多少違っているところがあります。

売り渡して家業としている。遠くの蝦夷地では商人と相対にて直接交易をすることがあり、そこへ行く商人は松前で運上金を納め、その請負場所へ入り込むのである。この運上金は武家の知行収入となる。知行取りは多いが、石（知行米）取りの武士は家中には一人もいない。」とあり、場所請負の状態を大まかに知ることができる。

場所請負人はアイヌの人たちと交易する権利を持っているだけで、その土地に住んでいる人たちを支配するような権利は無かった。ところが、それまで鰊の豊漁で繁栄していた福山（松前）や江差地方では次第に鰊が獲れなくなったことから、享保四年（一七一九）、西蝦夷地（寿都周辺から北の地域）へ鰊漁のための出稼ぎが許され、道南地方からの出稼ぎ者が多くなった。これを追鰊（おいにしん）と言っている。

こうして出稼ぎに来るときは一家の働き手や親戚、仲間で船を仕立て、最小限の日用品を積み、荒波を乗り越えて漁場を目指した。しかし資力も乏しく、その土地へ行っても漁業を行う権利も無かったので、浜を借りて鰊を獲り、漁獲した分から製品として二割を徴収されたので、このような出稼ぎ人を「二八取り」と言っている。

場所請負人は二割を徴収していたがその製品も品質の良い物に限ったので、実際にはその徴収する割合はもっと多かった。また、追鰊で来る出稼ぎ人は、生活のための食料品なども請負人からの支給を受け、切り揚げのときに精算していた。

請負人は知行主に対して一定の運上金（税金に相当）を納めなければならなかったが、アイヌの人たちや出稼ぎ人は、知行主に対して何ら納税のような義務は全く無かった。請負人は個人による商売だが、場所内では藩から任された用務も果たさなければならなかったので、半官半民のような立場でもあった。

それらのことについては条文として示されている。

請負人の取り扱えること

一、アイヌの撫育（撫育＝可愛がり育てる・介抱とも言う）、日用品を供給すること

二、毎年二期（六月・一二月）運上金を納付する外、一一月中に運上金の二分に当たる積金をすること

三、運上屋や荷物庫の修理や再築のこと

四、煎海鼠（イリコ）は御用品として毎年献納のこと

五、煎海鼠、干鮑など俵物御用品の収獲の増加を図ること

六、官吏や警備の者の通行や旅宿を請負うこと

七、公文書の逓送人の馬継立て（馬を用意）のこと

八、難破船救助のこと

九、外国船を見つけ次第急報のこと

十、御備米を毎年新規に仕入れのこと

十一、松明（たいまつ）三百本、わらじ三百足を毎年新規に準備のこと

十二、幕串百本（長さ九尺七寸）を毎年新規に準備のこと

十三、オットセイは捕獲次第上納すること、またラッコ・鷹の羽・熊の胆・熊皮・シマネズミ・アザラシ・チョウザメなどは買い入れ値段で買い上げに応じること

これらの事項は年によってつけ加えられたものもあり、これを守らなければ処罰された。運上金の外にもいろいろな負担もあり、また藩主の参勤交代や藩の祝いごと、凶事があるとその費用の献金を命じられ、資本の弱い商人ではとても請負人は勤まらなかった。

天明五年（一七八六）、松前を出立して西蝦夷地を巡行した藩士の記録に、

「松前志摩守ヘ運上金トシテ、利潤ノウチカラ納メテイルノデ、コノ商家ヲ運上屋トイウ。

フルビラ運上屋一戸

海岸里数三里余り（以下略）

とあり、古平の海岸線が描かれている。

この頃の別な記録にも、

シャコタン　運上屋　一戸

ヒ　ク　ニ　同　同

フルヒラ　同　同

カミヨイチ　同　同

シモヨイチ　同　同

などとある。

〈続く〉

芒の穂波

大澤文子

厨辺にふつふつとコーヒーの香がたつ。

わが一日のはじまりである。炎暑と言われた夏日に身も心も萎え、ペンを持つ日々もなく過ごした幾日か。漸く初秋の風に息づき垣添いに伸びたつ芒の穂波を眺めていた…とさまざまな思いが心をよぎりゆくは何故…。

そうゆうわが三人の子らもわが道をゆくよ…と、それぞれ旅立っていったあの頃。

私にも町の仕事が種々待っていたのだ。

まず、昭和三十九年四月一日付けで町の民生児童委員として任命されたのだ。「大切な福祉国家である…」とは充分認識していたが、今までとは別の仕事である。

「私につとまるならば…」と、即座にお引け受けしたのは言うまでもない。がそれからは自分なりに福祉の本を処々から借り受け勉強した。だがなかなか難しい。

月一回の民生委員会に、はじめて出席してみた。その頃の総務は阿彦氏、副総務は岩間ヨシさん、菊池スヱさんだったと記憶している。

研修のため、地方へ出かけるよう指名されることも多く、岩間ヨシさんとはなんかいか地方へ同行したこともあたっが、いつもやさしく導いていただいた思い出はなつかしい。

幾年か過ぎ、総務は金子藤市氏、副総務は大澤文子が任命された。

その頃、札幌厚生年金会館にて開催された「道民生児童委員大会七十周年記念式典」に出席するよう、総務から指示があった。

何かひとりでは心細い気もしたが、持ち前の気質で呑気にかまえ、バス、汽車を乗り継ぎ札幌へ出かけた。各地域からの出席者で広い会場は超満員だった。受付で資料を受け取るとひとり身はらく、舞台近くの席をとることができた。

やがて道民生児童委員大会の開会、各地域から表彰される人々の行事も拍手のうちに終了。

いよいよ作家田中澄江氏の公演に接する機会を得たことをうれしく思った。一言も聞きもらさずと身をのりだして緞帳のあくのを待った。

鳴り止まぬ拍手のうちにすると緞帳はあき、椅子に腰かけられた小柄な「田中澄江氏」がうつしだされたのだ。

「あー！」ワインカラーの和服は目を見はる程美しく映った。

田中氏の開口一番！

「只今資料をいただきましたけれどもねェ！　私の紹介欄に明治十四年生まれとありましたけれどもねェ、それでしたら百歳を超えていますよ！　アハハ…」

ミスプリントにチクリとやわらかな指摘を一言！

「でもねェ いいですよ、日本最長寿者の泉重千代翁にあやかって私も長生きしなさいと言うことでしょうからネ　ウフフ…」

「でもネェ、私は明治四十一年生まれの七十八歳ですよ。ありがとうございました」

チクリと当局に痛いところをついたあとは、やさしい笑顔を見せた田中澄江氏だった。

「ウワアー　お若い！」一瞬会場にどよめきが起こった。

氏は好奇心旺盛！　趣味として山登り大好き！　年間山登りを励行、現在で八百回という。どんなことをしても千回を実現したい…。

「実はねえ、北海道へ着いたのは昨日ですけどねえ、『早速ニセコのメクンナイ岳』へ登ったんですよ。シラネアオイが美しく咲いていましたネエ」

淡々と話される田中澄江に「ウワアすごい！」

再び観衆のざわめきの声！

気取りもなく気さくに話される物腰に心から「大作家田中澄江氏」を感じた。

群集に押され会場をあとにしたのははや夕暮れ、「山登り千回達成を祈り」札幌駅から帰途についたが、頬を伝う「涙はなに…」

NHKテレビ

『ほっからんど北海道』

古平町が紹介される

今から一五〇年ほど前の運上屋岡田家の記録に「秋味（サケ）の時期には、ハマナカ（浜町）、メヽタレ（港町）、ヲタスツ（歌棄）の小使（アイヌの役びと）に清酒を小樽で遣わして、アイヌにサケを獲らせ、交易品としていた」また「秋味網は彼岸の中日におろし、水主（かこ）一人に付き清酒一盃ずつ、濁酒四斗入りを遣わす。毎日、米二升を貸し付け、頭分の者どもへは毎夜濁酒二盃宛遣わす」などとあり、初漁の日には、清酒や濁酒が与えられた。

水揚げしたサケはアイヌの人たちが四分、六分は運上屋で取り、アイヌの人たちの四分の取り分が交易品となっていた。

白毛四束　米八升、清酒四升
黒毛五束　米八升、清酒四升

秋味白毛は海で獲ったもの、黒毛は川で獲ったものと考えられる。サケは二〇本で一束としていた。

もともとアイヌの人たちはサケをカムイチップ（神の魚）と呼び、重要な食糧であった。それでこのサケの獲れるフルヒラ川、ウタスツ川、ラルマキ川、チョペタン川の河口付近に住み、産卵のため遡って来るサケをマルッポというサケ用のモリで獲っていた。廻り淵付近はサケの千石場所だったという。

明治になり、サケ漁は引き網、刺網、定置網などで大量に漁獲されるようになったが、乱獲や密漁による漁獲高の減少から保護規則が定められ、古平のサケ漁は明治末から次第に不振となった。

さて、時代は移り「獲る漁業から、育てる漁業へ」と大きく転換し、古平漁協では昭和五八年にサケ孵化場を新設し、古平川を遡上するサケを捕獲、採卵して孵化させ古平川に放流している。現在は真狩村から受精卵三〇〇万個、稚魚二〇〇万尾を購入し放流しているが、その回帰率は二％程度だという。

この日行っていたサケの捕獲は組合員のボランテアによるもので、期間中六～七回行なわれるが、これからの時期、川の中での長時間の作業はなかなか大変とのことである。昨年の漁獲高は二五〇トン、七〇〇〇万円であった。

漁期は九月初旬から一〇月中旬くらいまでで、漁獲は定置網で現在一五か所あるが、刺網での漁獲は原則禁止されている。

（漁協阿部管理部長の談話から）

→古平川でのサケの捕獲作業

→漁協の阿部圭二管理部長と、NHK札幌放送局リポーターの上平奈波さん

NHKテレビで連続放送されている『ほっからんど北海道』の古平での収録が先月二九日に行われ、一〇月一二日（金）放送の予定でしたが、国会討論が優先して放送されているため延期になり、今のところ放送予定日は未定とのことです。放送のあとに当日収録した「ごめっこクラブ」「ふるびら温泉」「五百羅漢」などの収録の様子をお伝えしたかったのですが、「古平川でサケの捕獲」に関連したことを先にお伝えしました。

鉄棒に絡みて遊ぶわが脚のしなやかなりし少女期杲し

今のいま遭ふ者よ一瞬にわが手の甲の秋蚊を見つむ

枯れ原に陽の射しくれば枯葉らは命を得たる如くかがよふ

まざまざと肉体の衰る日の多き池の金魚に心寄り行く

寝部屋にお義理のやうに鳴るテレビベットの我は勝手に眠る

心音

瀧内　優子

星ひとつ流れてついて音もなし虫鳴き出づる十方の闇

人はみな眠りしづもる夜の淵に流れる星の如きわが歌

おのずから亡ぶ命をいとしまむ霊魂不滅とうたひしは誰

ひくひくと人の命を思ふとき地球は小止みなくまわりをり

吐く息も吸ふ息もみなあえかたにて休むことなき心音きこゆ

❖❖編集雑記❖❖

▽四月以来『せたかむい』の発行が遅れ、しかも不定期になって、いろいろとご迷惑をおかけしておりますがどうにか一〇月号は今月中に発行出来そうです。ご愛読いただいている熱心な読者の皆さんに励まされながらやっている現状ですが、これからの時期は行動が思うにまかせませんのでいささか不安です。また、皆さんから昔のことで話題になることや、伝えたい体験談などありましたらぜひお話しをお聞かせください。

▽文化祭にともなう作品展示会が間もなくですが、今回もまた『古平の昔を知る写真展』を行う予定です。同時に展示した写真に解説を加えた写真集を作成して配布しますのでご覧ください。

▽再び『ほっからんど北海道』について～追加訂正～『せたかむい』を印刷しようと思っていた矢先に映像プロダクションから、「古平町」の放送が一九日（金）に決定したとの連絡がありました。その日は、今まで国会中継で延期されていた赤平市も同時に放送されるとのことです。これは偶然なことから赤平市と一緒になりましたが、実は古平と赤平という地名になったアイヌ語の語源は全く同じなのです。

表記の仕方は多少の違いはありますが、どちらも「フレー ピラ」というアイヌ語に由来しています。フレー＝赤い・ピラ＝がけという意味です。

フレーピラという発音をそれに近い漢字に当てはめたのが古平で、フレーは赤いという意味から赤、ピラは発音そのままに平という字を当てたのが赤平です。

では古平でその地名の由来となった場所はどこかというと、鴎居木の対岸、古平川の中流辺りに続くがけだと言われていますが、一説では丸山の群来町側のがけが語源ではないかとも言われています。

現場は見ていませんが、写真で見ると赤平にも古平河岸のがけと同じような場所があって、やはりここが語源だと言われていますが異説もあります。

どちらも「フレーピラ」の語源になったと言う場所はありますが、研究者の間からは？マークがつけられているようです。

北海道では、このようにしてアイヌ語から名づけられた地名は数多くあります。

悠

雑詠〔八月号〕

主宰　水見壽男

祝典の高ぶり未だ風光る　越野清治

看経に轉こぼる庭大樹

葉桜や音を呑み込む宮太鼓

行く雁に贈る言葉のありにけり

海峡の昴り止まず花の忌へ　山口悦子

神威岩寂然として卯浪かな

雑念を過去に納めて菖蒲風呂

雨催ひ牡丹大輪剪らばやと

蚊帳古色蒼然堂々と　越野敏雄

遠き日の父蘇る蝦蛄を採る

遠き日の蝦蛄煮る母の背を見し

卯浪立つ岬の弁慶仁王立ち

吹流し戦ぐ源氏の弓一矢　高橋重子

一湾のけふ瑠璃色や夏来る

緋牡丹の雨をふふみてより色と

岬山を越え新緑に酔ひにけり

やはらかな風を操る吹流し

新緑のまつただ中に風生まる

春風に誘はれふらり旅ごころ　外山俊久

一雨に若葉が映える山の木々

ウォーキング緑の風と戯れる

五月晴歩けば風の友となる　堀典子

網揚ぐや網に朝烏賊どつと乗り

水底に新緑の影透きてをり

透明な波に心をあづけ夏

弾みたる声かがやいて浅蜊採る

すつぱりと髪切ってより更衣　本間寿昭

潮風や川波匂ふ五月尽

沖風に川波匂ふ鮎の影

名水の里に棲みつく若葉風

松蝉や裾波重き神威岬　渡辺嘉之

麦秋や夕日の彩と野の彩と

黄昏れて光と影と麦の秋

暮れさうで暮れぬ彩あり麦の秋

夕波に麦秋の丘ふと思ふ　室谷弘子

若葉風大海原に抜けて行く

新緑に湾の一景呑まれをり

新緑をなほも深める雨一ト日

向き変へて見ても絵になる夏岬

【句評】

怒濤

【二六】

―九月号―

松蝉の騒音なして空ゆすり　越野清治

漆黒の岬を揺るがす雨蛙

年尾碑へロシアタンポポ咲き誇る　斉藤波留

羊蹄山の万緑の息深く吸ふ

百年の形見の衣衣魚の跡　山口悦子

父逝きて筆人知らず曝書かな

接岸に奇岩の多しボート漕ぐ　越野敏雄

群生の玫瑰の風岬の径

緑の湯宿は老いのくつろぎに　大和田絵伊

揉みあげし新茶土産に孫連れて

草清水しばし遊ばす指の先　高橋重子

立ち話扇を出して煽ぎくれ

草芽生ふ部落総出の牧開　外山俊久

風軽く香りほのかに夏初め

どんぐりの樹液にさざる兜虫　堀典子

朝凪の沖の光芒眺めけり

雲の峰突き抜けて行く漁場遠し　本間寿昭

降るもよし降らぬもよしや夏座敷

夏霧の波音までも消す深さ　渡辺嘉之

風鈴の夕べの風によく鳴つて

蝉の声湾の一景深めおり　室谷弘子

夕凪や競ひ出でたる船の音

古平俳句会

短歌

古平町岬短歌会

草も花も喜び立てる雨の夜の明けしあぢさゐの光の怪し　池田テル

雨に咲く涼やかなりしアジサイに友の面影重ね見るやも　金子寿子

真夏日を鳴きつづけるは蝉の声夕日沈むも暑さ変らず　坂本信子

大谷校の孫と並びて仏前に恩徳賛歌うたふ盆の日　鈴木時子

色うすく花の元気も今ひとつ庭の紫陽花今迄になく　田中香苗

ジャガ芋畑うすむらさきの花一面羊蹄のふもとの我が故郷は　寺田カツ子

久々の雨に伸び行くズッキーニ大葉の這ひて命育む　仲谷喜美能

シルバーカー押しゆく道辺の蛇苺紅くうるるを蕗の葉に摘む　東美知

朝の庭にこんもり丸き紫陽花の球揺られをりふり来し雨に　堀典子

俳句

古平俳句会

万緑や日毎に濃ゆき海の色　越野清治

名を誇る男しやく薯の花盛り　斉藤波留

前浜で遊び番屋で夏炉焚く　山口悦子

綿飴の切れて終へたる夏祭　越野敏雄

夏霧や山に秘め事ある如に　大和田絵伊

胡瓜もみガラスの器ごとに冷え　高橋重子

初郭公緑萌え立つ林より　外山俊久

樹の下に雫れる光揺れて夏　堀典子

一島の子等の手を借り昆布干す　本間寿昭

炎天の砂につまづく風ありし　渡辺嘉之

古稀の夫日毎長引く三尺寝　室谷弘子

姉の背を母と重ねて墓洗ふ　仲谷比呂古

古平町史年表

昭和33年（1958）　～続き

5／－：読売新聞「全国民謡めぐり」で古平のソーラン踊りが紹介される

5／21：六志内道路改良工事について横関建設と随意契約を結び着工する

6／20：NHKラジオサービスデーに、小樽放送局が料理講習会を開く

6／23：古平町産業振興特別委員会が設置される

7／8：積丹地方開発振興会総会で、古平～美国間の海岸道路の建設について協議が行われる

7／－：第10回後志管内町村職員野球大会が古平町中島グランドで開催される

同　：札幌法務局古平出張所が浜町の改装した庁舎に移転する

7／－：古平漁港波浪流砂試験が北大実験用水槽で行われる

7／－：北電古平営業所社屋が現在地に新築落成する

8／7：「古平小唄」の振り付け講習会が古平小学校で行われる

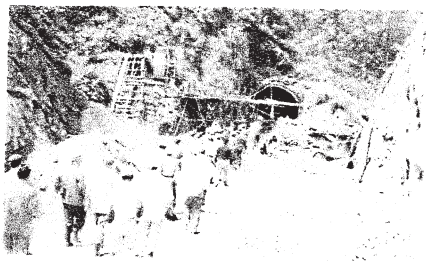
8／13：北海道開発庁長官山口喜久一郎が古平漁港を視察する

8／－：新地緑地帯と中島グランドに公園を設置する

10／4：吉田一穂「魚歌」詩碑を水見悠々子が厳島神社に建立し、一穂を招いて除幕式を行う

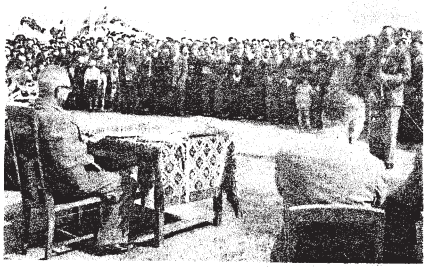
10／5：古平高等学校創立10周年記念式典が古平中学校体育館を会場に行われる。式では校歌の発表会があり，作詩した吉田一穂が解説し，同校高橋啓子教諭が詩を朗詠した。引き続いて祝賀会が開かれる

10／6：記念事業として吉田一穂の講演会と，藤間きよしの振り付けによる古平小唄の踊りが古平中学校体育館で披露される



↑ 六志内トンネル工事に着工

↑ 古平町役場チームの街頭行進



↑ 開発庁長官に陳情する伊藤町長

↑ 吉田一穂と古平小学校の同級生

↑ 厳島神社境内で一穂と伊藤町長